

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02278

研究課題名（和文）『音楽についての対話』（1000頃）の校訂と分析

研究課題名（英文）Dialogus de musica (c. 1000) Edition and analyse

研究代表者

西間木 真 (NISHIMAGI, Shin)

東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：10780380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：1000年ごろに北イタリアで執筆されたとされる『音楽についての対話 Dialogus de musica』は、中世ヨーロッパの音楽理論および音楽教育実践に変革をもたらした重要な著作である。その音楽史上の重要性にもかかわらず、現存する写本間で食い違いが多く、テキストの伝承が複雑であることから、現代の研究者によって校訂されることがこれまでなかった。本研究では、『音楽についての対話』を伝える中世写本の調査を行い、批判的校訂を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、『音楽についての対話』の本来の姿が明らかになった。その結果、従来の研究で知られていた理論や曲例が、ドイツ語圏で書き加えられたものであり、再検討の必要があることが明らかになった。一方、旋法が明確ではない聖歌の旋律を書き換える方法など、これまで知られてこなかった理論が展開されていることが分かった。本校訂により、11世紀における音楽理論の成立、およびその後の展開と受容について研究する基盤が整ったといえる。

研究成果の概要（英文）：This project intend to make a new critical edition of the Dialogus de musica, anonymous musical treatise written around 1000 perhaps in the region of Lombardy. This is the most diffused, so influential treatise in western medieval europe after the De institutione musica of Boethius and four treatises of Guido of Arezzo. The tangled tradition of about sixty medieval manuscripts prevented scholars as Michel Huglo and Karl-Werner Gumpel to establish the contemporary critical edition. I hope our new latin text based on all surviving manuscripts will replace the historical edition by Martin Gerbert published in 1784.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽についての対話 中世音楽理論 中世音楽教育 中世写本

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

西洋音楽史の上で 11 世紀は、現在、世界で広く一般に用いられている音楽の理論と記譜法、さらにそれらに基づく音楽教授法の基礎が確立した変革期である。すなわちイタリアの二人の音楽教師、『音楽についての対話 *Dialogus de musica*』の著者 (1000 年頃) とアレツォのガイド (990 頃-1033 頃) によって、音階上の 7 つの音を A から G までのアルファベット 7 文字で表すアルファベット記譜法、平行線上に音符を配置して音の高さを視覚的に表示する譜線記譜法(現在の五線譜)、モノコルドや学習歌を取り入れた実践的なソルフェージュ教育法が考案されたのである。ギリシア語に由来する難解な専門用語を一切使わない平易なラテン語で書かれた二人の著作は、しばしば同じ冊子体に書写され、一連の教会改革の流れの中でアルプス以北のヨーロッパ各地に普及した。その結果、ヨーロッパ各地で典礼聖歌集(楽譜)の全面的な再編纂と書き換えが行われた。アルファベット記譜法と譜線記譜法で書かれた楽譜のおかげで、それまで口頭で伝承されてきた典礼聖歌のレパートリーの独習および初見視唱が可能となったため、典礼聖歌レパートリーの習得に費やされる時間が大幅に短縮されることになった。音楽理論の実践化に伴い、学習歌やソルフェージュ歌の他に、作曲の初歩なども取り上げられるようになった。

音楽史にこうした重大な変革をもたらした二人のイタリア人音楽教師のうち、アレツォのガイドの著作については、1950 年代以降、オランダの音楽学者 J. スミス・ファン・ワースベルフ (J. Smits van Waesberghe) によって史料の詳細な調査が行われ、学術的な批判的校訂版が出版された。その結果、各国語で訳出され、以後、さまざまな研究の足掛かりとなった。一方、『音楽についての対話』は、現代の研究者による校訂が実現されず、現在なお 1784 年に出版されたマルティン・ゲルベルト (Martin Gerbert) のエディションが用いられている。学術的な基盤が無いため、研究面でも概説を超えるものはみあたらないのが現状である。

『音楽についての対話』の校訂および研究が遅れている理由の一つは、子供でも聴いてすぐに分かるようなより身近な聖歌からとられた約 100 曲の曲例が含まれていることであろう。これらの曲例は、写本が書かれた地域の典礼や音楽教育の伝統を反映しており、説明や曲例など史料ごとの違いが大きい。その記譜法も音高の不明瞭なネウマ譜から、アルファベットによって記譜されたものまで様々である。そのため『音楽についての対話』の校訂には、多様な記譜法による多数の曲例の扱いをめぐるテクニカルな問題が生じる。同時に古典古代にさかのぼる音楽理論についての知見の他に、地域ごとに異なる中世単旋律聖歌のレパートリーとその記譜法についての十分な知見が求められる。音楽理論と音楽実践は、現在では異なる研究領域とみなされる傾向にあるため、『音楽についての対話』はその重要性にも関わらず、現代の研究者にとって扱いにくい文献とされてきたのである。

## 2. 研究の目的

1784 年に出版されたマルティン・ゲルベルトによるエディションは、各旋法ごとに挙げられた曲例などに多くの書き換えや加筆がみられ、オリジナルのテキストと異なるものであることはこれまでも指摘されてきた。1970 年代にドイツの音楽学者カール=ウェルナー・ギュンペル (Karl-Werner Gumpel) が、『音楽についての対話』の研究と校訂を予告したが、エディションはおろか、いかなる研究論文、調査報告も発表することなく 2015 年に没した (ギュンペルの手

書きおよびタイプライターによる調査ノートは、現在、アメリカ、ワシントンのノートル・ダム大学図書館に保管されている)。

2007年にはイタリアの研究者ルチア・ルドヴィカ・デ・ナルド (Lucia Ludovica de Nardo) がイタリア語とラテン語の対訳を出版した。この中でルドヴィカ・デ・ナルドは、ゲルベルトのエディションの改訂を行っているが、ゲルベルトが底本としたドイツ系 3 写本と(おそらく北フランスからベルギーにかけての地域に由来する)フランス系 1 写本を校合したにすぎず、学術的な校訂版とはよべない。ゲルベルト同様にドイツ系写本のヴァリエーションに基づいているため、オリジナル・テキストに合致しない解説も見受けられる。現代の学術的なレベルでの批判的校訂版が存在しないことから、『音楽についての対話』に関する研究は遅れており、1969年に M. ユグロが発表した『音楽についての対話』の起源と著者をめぐる論文以外に、特筆すべき研究成果はみとめられない。

本研究では、現存が確認されている全ての中世写本を調査した上で、新しいクリティカル・エディションの校訂とテキスト分析を行い、今後の研究の基盤を確立することを目的とする。同時に異本やヴァリエーション、曲例として挙げられている典礼聖歌のレパートリーや旋律を検証し、テキスト伝承や地域ごとの音楽教育および音楽実践の伝統を明らかにする。

### 3. 研究の方法

まず『国際音楽史料目録 (RISM B III 1-6)』をはじめとする中世写本カタログおよびこれまでに編纂された様々なエディションに基づいて『音楽についての対話』を含む史料の所在を確認した。次に各地の図書館からマイクロフィルムあるいは PDF 画像を取り寄せ、それらの複写物を使って全写本のテキストを比較校合した。複写物で確認できないものについては、随時、現地の図書館でオリジナル史料の調査を実施してきた。

校合の結果をふまえて史料のグループ分けを行い、イタリア起源の史料群に基づいてテキストを校訂した。その際、テキストをよりよく理解するために、日本語訳の作成も行った。

### 4. 研究成果

中世写本目録の調査から 16 世紀以前に書写された『音楽についての対話』の写本は、断片も含めると 47 点にのぼることが明らかになった。

Berlin, Staatsbibliothek, Preußischer Kulturbesitz, Ms. lat. oct. 265, f. 9v-22v

Berlin, Staatsbibliothek, Preußischer Kulturbesitz, Ms. theol. lat. qu. 261, f. 41r-47v

Brussel, Koninklijke Bibliotheek Albert 1, 1485-1501, f. 273ra-vb

Brussel, Koninklijke Bibliotheek Albert 1, 10162-66, f. 40vb-46ra

Brussel, Koninklijke Bibliotheek Albert 1, II 784, f. 43v-56v

Cambridge, Trinity College Library, O. 9. 29 (1441), f. 85v-95r

Darmstadt, Hessische Landes- und Hochschulbibliothek, 1988, f. 101v-110r

Erfurt, Stadt- und Regionalbibliothek, 8° 93, f. 68r-74r

Erfurt, Stadt- und Regionalbibliothek, 8° 94, f. 30r-35v

Firenze, Biblioteca Medicea Laurenziana, Plut. XXIX. 48, f. 33v-38v

Firenze, Biblioteca Nazionale Centrale, Conv. Soppr. F. III. 565, f. 33v-43v

Firenze, Biblioteca Nazionale Centrale, Magliab. XIX. 36, f. 98v-100v

Firenze, Biblioteca Riccardiana, 652, f. 36v-47v

Gent, Universitätsbibliothek, 70, f. 50vb-55rb

Cologne, Bibliotheca Bodmeriana, Cod. Bodmer 77, f. 82r-102r

Kassel, Landesbibliothek und Murhardsche Bibliothek, 8° Ms. math. 10, f. 1r-10v

Leipzig, Universitätsbibliothek, 1492, f. 107v-113r

Leiden, Universitätsbibliothek, B.P.L. 194, f. 22v-39v

London, British Library, Add. 10335, f. 15v-22v

London, British Library, Harley 281, f. 25v-32r

Milano, Biblioteca Ambrosiana, D. 455 inf., f. 21v-29r

Monte Cassino, Biblioteca Abbaziale, Cod. 318, p. 218-236

München, Bayerische Staatsbibliothek, Clm 14965a, f. 33r-37v

München, Bayerische Staatsbibliothek, Clm 19421, f. 1v-12v

München, Universitätsbibliothek, 8° 375, f. 65r-71v [I]

Napoli, Biblioteca Nazionale, VIII. D. 14, f. 1v-18v

Oxford, Balliol College Library, 173A, f. 100r-106r

Oxford, St. John's College Library, 150, f. 17r-22r

Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 3713, f. 30v-38r

Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 7211, f. 106v-115r

Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 7369, f. 47r-59v

Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 7461, f. 19r-25r

Partridge Green, St. Hugh's Charterhouse (Parkminster), dd. 10 (A. 33), f. 1ra-7rb

Pistoia, Biblioteca Capitolare, 100, f. 40r-49v

Rein, Stiftsbibliothek, Cod. XXI, f. 47r-60r

Rochester, Eastman School of Music, Sibley Musical Library, Ms. 92 1200, f. 1r-11r

Roma, Biblioteca Vallicelliana, B 81, f. 76r-82v, 71r-75r

Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, Reg. lat. 1146, f. 25r-34v

Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, Reg. lat. 1196, f. 1r-11r

Troyes, Bibliothèque municipale, Ms. 2142, f. 158v-166v

Venezia, Biblioteca Nazionale Marciana, lat. Cl. VIII. 24, f. 1r-7v

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 51, f. 46r-48va

Wolfenbüttel, Herzog-August-Bibliothek, 334 Gud. lat. 8°, f. 112r-127r

(断片)

Milano, Biblioteca Ambrosiana, M. 17 sup., f. 48r-49v [XVII-XVIII glosé]

Munchen, Bayerische Staatsbibliothek, Clm 14663, f. 21v-24v [I-XI]

Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, Reg. lat. 72, f. 60v-64v [I-XIV]

Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, Vat. lat. 10645, f. 2r-v, 1r-v [II-IV, IX-XI ?]

さらに『音楽についての対話』の一部を抜粋した写本が 11 点確認された。そのうち 6 写本では、各旋法について曲例をまじえて解説した後半部分のみが書写されている。各旋法について曲例をまじえて解説した後半部分が、「トナリウス tonarius」（各旋法ごとに聖歌の歌い出しの旋律パターンを整理した音楽文献）の解説として引用されている例も確認された。これらの史料では、8 旋法の全てにおいて『音楽についての対話』から抜粋されているとは限らず、また曲例などの書き換えも見られるため、本研究の対象からは除外した。

以上の写本史料の調査分析をふまえて、イタリア地域起源の写本群に基づいて校訂作業を行った。その結果、ゲルベルトのエディションに基づいて行われてきた従来の研究を根本から見直す必要があることが明らかになった。例えば、各楽音に対応する旋法の図表(Gerbert, p.264)は、『音楽についての対話』の理論上の特徴としてしばしば言及されるが、イタリア系写本には含まれておらず、また史料ごとのヴァリエーションも際立っていることから、もともと『対話』には含まれておらず、後から加筆されて流布したと考えられる。また旋法の識別が曖昧な聖歌の旋律を書き換える方法に関する説明では、アンティフォナ Domine qui operati sunt が例に挙げられているが、その開始音を G 音として第 8 旋法に分類する史料群と、5 度上の c 音から開始する史料群に分けられることが明らかになった(Gerbert, p.256b)。これまでに確認した中世典礼音楽写本では、後者の例が多いことが確認されたが、どちらもイタリア写本にはみられないヴァリエーションであり、現存する典礼音楽写本を元に理論面での裏付けを進めるとともに、この部分をどのように校訂するか検討中である。

さらに複数の写本で、テキスト全体を書き下し文のように平明に単語を並び替えたヴァージョンがみられることが明らかになった。これらは主に北フランスからオランダにかけての地域で書写された史料であるが、南イタリア起源の写本にみられるヴァリエーションを含んでおり、今後、伝播経路について検討する必要がある。

校訂作業と並行して、11-12 世紀にフランスで書写された『音楽についての対話』写本の受容と伝搬について検討した。その結果、譜線記譜法への移行期に南フランスから北フランスにかけての広い地域で、『音楽についての対話』やアレツォのガイドによって確立された実践的な新しい音楽理論を、古代ギリシアに由来する伝統的な音楽理論と融合する試みがなされたことが分かった。今後、本研究で作成されたエディションに基づいて各史料のヴァリエーションの見直しを進めれば、『対話』の伝播経路や受容だけではなく、地域ごとの音楽教育の伝統が明らかになると期待される。本研究で校訂した『音楽についての対話』のラテン語テキストは、本エディションに基づく Christian Meyer のフランス語対訳を付けてヨーロッパの出版社からの刊行を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 NISHIMAGI, Shin	4. 巻 64
2. 論文標題 Analyse des liens genetiques entre deux manuscrits musicaux attribues a Luxeuil (Paris, BnF, lat. 7211 et lat. 7212)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Gazette du livre medieval	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 NISHIMAGI, Shin
2. 発表標題 Quelques theories specifiques selon un tonaire aquitain dans Paris, BnF lat. 7185
3. 学会等名 IMS Study Group 'Cantus Planus'（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 NISHIMAGI, Shin
2. 発表標題 Melodies intervalliques dans les manuscrits du Dialogus de musica
3. 学会等名 Philologie et musicologie IV-Morimondo 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NISHIMAGI, Shin
2. 発表標題 Fautes revelant une theorie meconnue dans une tradition des tonaires aquitains
3. 学会等名 Congres international franco-italien: "Qui di tradition dit faute ?"（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 NISHIMAGI, Shin
2. 発表標題 Arraches, disperses, abandonnes en terre etranges ... quelques fragments des manuscrits notes
3. 学会等名 Colloque des Journees de Musiques Anciennes (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----